

障害者スポーツイベントにおけるボランティアの参加動機
- 性別、年代別、活動経験別による比較 -

松本 耕二・國本 明德・北村 尚浩・仲野 隆士

障害者スポーツイベントにおけるボランティアの参加動機 － 性別、年代別、活動経験別による比較 －

松本耕二¹⁾ 國本明德²⁾ 北村尚浩³⁾ 仲野隆士⁴⁾

A Comparative Analysis of Motivations of Volunteers at Sports Events

Koji Matsumoto¹, Akinori Kunimoto², Takahiro Kitamura³ and Takashi Nakano⁴

Abstract

The purpose of this study was to examine the structure of motivations of volunteers at sports event. Data for the study was collected by questionnaire from people who registered as volunteers. The sample consisted of 289 volunteers who participated in The Special Olympics Nippon National Summer Games (this event was for the athletes with mental retardation), which was held for 3 days in August, 2002. Factor analysis was performed to identify the factor structure underlying the motivations for volunteering. Factor score was then compared for differences in sex, age and activity experience.

The main results were as follows:

1. Many of the samples were single (65.1%) , female (78.5%) and students (48.6%) of a young age group of 10-20 years old (56.7%) .
2. Factors underlying volunteer motivations were identified and named: self-actualization, contribute for society, support to athletes, recreation, invitation, sport, self expression and reward.
3. As a result of computing the mean factor score, “self-actualization”(4.12) was the highest and was the order of “support to athletes “(3.93) and “contribute for society”(3.86) . On the other hand, the score of “invitation” (1.72) and “reward” (1.74) was low.
4. As a result of comparing the mean factor score by sex, the significant difference was seen below with the 5% level in “invitation”, and the male was higher than the female.
5. when age groups were considered, mean factor score differ significantly for in “self-actualization”, “support to athletes”, “recreation”, and “reward.”
6. By comparison by volunteer activity experience, the experienced showed high score significantly in “support to athlete”, “recreation”, and “self-expression” compared with the beginner.

Key words : volunteer , motivation , sports event

1) 山口県立大学社会福祉学部

〒 753-8502 山口市桜島 3-2-1

2) 東京 YMCA 社会体育・保育専門学校

〒 135-0016 東京都江東区東陽 2-2-15

3) 鹿屋体育大学体育学部

〒 891-2393 鹿児島県鹿屋市白水町 1 番地

4) 仙台大学体育学部

〒 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18

1. Faculty of Social Welfare, Yamaguchi Prefectural University, Sakurabatake, Yamaguchi 753-8502

2. Tokyo YMCA College of Physical & Early Childhood Education, Toyo, Kouto-ku, Tokyo 135-0016

3. National Institute of Fitness & Sports, Kanoya City, Kagoshima 891-2393

4. Faculty of Physical Education, Sendai University, Shibata, Miyagi 989-1693

キーワード : ボランティア 参加動機
スポーツイベント

I. はじめに

わが国のボランティア活動は、高齢者や障害者等を対象とした社会福祉領域での活動が中心であったが1995年の阪神淡路大震災を契機にボランティア活動に対する認識やその重要性が指摘され、幅広い領域・分野で展開されている。

スポーツの領域におけるボランティアは、日常的なスポーツ指導やクラブの運営、各種スポーツイベントの中で活躍をみることができよう。これまでの「するスポーツ」や「みるスポーツ」にとどまらず「支えるスポーツ」としてのボランティア活動(SSF, 2001)は、新たな意義と価値が見いだされてきた。従来のスポーツ大会(イベント)では、専門的な知識を有する関係者とその関係団体によって営まれており、それ以外の者は観戦することのみでしか関わることができなかつた(新出ら, 1998)。しかし近年のスポーツイベントでは、大会開催地周辺の地域住民や活動に関心のある人々は、ボランティアとして大会運営に関わる参加機会が創出され、より身近にスポーツシーンを意識し、参画できる状況に変わりつつある。先のサッカーのワールドカップやオリンピックなどのメガイベントをはじめ、国体や各種競技団体の全国大会においても、数多くのボランティアが全国各地から参加し、大会を成功に導く大きな原動力となり、高い評価を得ていることは周知のことであろう。スポーツにおけるボランティアは、イベントに関わる人的な資源としての補完機能を担うだけでなく、「ボランティア」としてイベント運営に関わることで、新たなスポーツ場面(シーン)に参加できるのである。このようなことから、地域住民をはじめとしたボランティアによるイベント活動への参加が、地域づくりや地域活性化につながっていくものとさらに期待されている。

ところで、ボランティア活動については、福

祉や社会教育の分野で多くの調査研究(佐藤, 1995: 杉本ら, 1995)がなされており、行為論をはじめ経営学的な視点(小島, 1998)等、多角的なアプローチがみられる。またスポーツにおけるボランティアに関する調査研究は、参加動機(佐藤ら, 1996: 松本, 1999: 松岡ら 2002)、活動期待・満足(高見ら, 1997)、継続意欲(長ヶ原ら, 1991)、情報入手(前田ら, 1997)等、個々のイベントを対象とした実証的研究報告があり、知見が蓄積されつつある。

ボランティアの意義や価値観が多様化した今日においては、ボランティアの活動を活性化させ、その活動を継続させるためにはモチベーションを管理しやる気を喚起することが不可欠である(田尾, 1999)。スポーツにおけるボランティアの参加動機を探求し、その心理行動を理解することは、ボランティアマネジメントにおいて必要とされ、ボランティア活動の推進に資すると考えられる。

本研究では、知的障害者の全国的なスポーツイベントにおけるボランティアの参加動機について、その構造を明らかにするとともに属性要因(性別、年代別、ボランティア活動経験別)を基に分析したので報告したい。

II. 研究方法

1. 調査対象

本研究の調査対象者は、2002年8月に東京都で開催された知的障害者スポーツイベント(スペシャルオリックス日本・夏季ナショナルゲーム東京大会:以後、大会とする。)へボランティアとして参加登録し、実際に活動に携わったボランティアである。

大会は3日間開催(2002年8月15~18日)された。海外5カ国の選手団を含む全国から1,569名の選手団(選手:1,006名、指導者・コーチ:563名)が上京し、初日は開会式などの歓迎式典、2日目から7会場11競技種目が展開、実施された。大会のボランティアは、事前申込みした登録者で、活動内容や役割について

の事前講習会に参加することになっている。そのため本対象者は、自ら活動への参加を希望したという意味で動員型のボランティアとは区別される。大会に登録したボランティアは3,298名、大会期間中の実働人数は延べ4,891名（初日1,522名、2日目1,737名、3日目1,632名）が活動に従事したと報告されている（大会実行委員会発表資料）。ボランティアの活動内容は、総務（受付、記録、運輸、グッズ販売、飲食サポート）、選手団（選手ケア、通訳、宿泊、安全対策、医療、レクリエーション）、競技支援（進行、記録、招集、表彰、施設、放送）、IT（情報センター、GMS）の4グループ19種に分類、登録され、可能な限り希望したところで活動できるように配慮されてる。

2. 調査期間

2002年8月～10月の3ヶ月間である。

3. 調査方法

本調査は、質問紙による調査を実施した。大会期間中に各競技場のボランティアデスクに質問紙を留め置き、活動終了後のミーティング時に配布された。質問紙への回答は、大会終了直後に記入するよう明記している。なお、質問紙の回収は、返信用封筒を同封し郵送にて返送してもらった。質問紙配布（留置き）数は1,500部、回収数は302部（回収率20.1%）、そのうち有効回答数は289部（有効回収率19.2%）であった。

4. 調査内容

本研究の質問紙は、個人的属性（8項目）、大会関連（13項目）、参加満足・継続意識（14項目）、参加動機（30項目）、活動関連（37項目）、日常的活動（6項目）、その他（17項目）の計125項目で構成されている。

参加動機は、松本（1999）のスポーツイベントのボランティア動機項目を基に先行研究を検討・精選し30項目の参加動機項目を作成した。尺度には「5. 非常にあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」のリッカートタイプの5段階評定尺度を用いた。

5. データの分析

参加動機項目の数量化にあたっては、「5. 非常にあてはまる」から「1. 全くあてはまらない」の素点をそのまま等間隔尺度を構成するものと仮定し、参加動機の構造把握のために因子分析を用いて参加動機因子の抽出を行った。各因子の解釈を行った後、各因子ごとの素点の平均値を算出し参加動機の実態を把握した。さらに各参加動機因子の平均値をデモグラフィック要因（性、年代、ボランティア経験）との関連を見いだすために、t検定および分散分析を行った。また分散分析において有意差がみられた要因については多重比較分析を施した。

III. 結果と考察

1. サンプルの特性

本研究のサンプルの特性を表1、表2に示す。

年齢は、「10歳代」（32.5%）、「20歳代」（24.2%）の青少年層が全体のおよそ6割であった。性別では、「女性」（78.5%）がおおよそ8割、また「未婚者」（65.1%）が過半数を占めている。学歴では、数値の中に在学中の者も含まれるが、「4年制大卒」（40.1%）が最も多く、ついで「高校卒」（31.0%）、「専門学校卒」（13.7%）、「短大・高専卒」（7.4%）と続いた。居住地は、「都内」（64.5%）在住の方が「都外」（35.5%）よりも多かった。職業では、「学生」（48.6%）がほぼ半数を占めている。ついで「会社員」（18.3%）、「主婦」（10.9%）の順であった。

大会開催の情報源は、「所属団体」（48.1%）が最も多く、ついで「友人・知人」（31.1%）と、双方を合わせると8割となる。また大会のボランティア活動に関わるきっかけでは、「自らすすんで」（55.7%）、「地域や職場（学校）などの所属団体に勧められて」（24.6%）、「知人・友人に勧められて」（15.9%）であった。イベントのボランティアにおいては、開催情報等の入手経路や活動参加への意志決定までに、会社や学校、地域における所属団体や友人・知人といった身近な交友関係からの影響が大きい（前

表1．サンプルの特性(1)

	n	%
【年齢】		
10歳代	94	(32.5)
20歳代	70	(24.2)
30歳代	32	(11.1)
40歳代	33	(11.4)
50歳代	33	(11.4)
60歳代以上	27	(9.3)
【性別】		
男性	62	(21.5)
女性	227	(78.5)
【婚姻】		
未婚	188	(65.1)
既婚	101	(34.9)
【学歴】		
中学校卒	10	(3.5)
高校卒	88	(31.0)
専門・専修学校卒	39	(13.7)
短大・高専卒	21	(7.4)
4年生大学卒	114	(40.1)
大学院修了	11	(3.9)
その他	1	(0.4)
【居住地】		
都内	185	(64.5)
都外	102	(35.5)
【職業】		
会社員	52	(18.3)
団体職員	11	(3.9)
公務員	9	(3.2)
自営業	11	(3.9)
主婦	31	(10.9)
学生	138	(48.6)
パートタイム・アルバイト	14	(4.9)
無職	10	(3.5)
その他	8	(2.8)
【ボランティア活動頻度】		
今回が初めて	99	35.2
年に数回くらい	93	33.1
月に1～2回くらい	51	18.1
週に1回くらい	26	9.3
週に2～3回くらい	11	3.9
ほとんど毎日	1	0.4
【身近な障害者】		
家族にいる	22	(7.8)
親族にいる	34	(12.0)
友人・知人にいる	67	(23.7)
よく見かける	34	(12.0)
たまに見かける	53	(18.7)
いない	73	(25.8)

田ら, 1997) ことがわかる。日常生活でのボランティア活動状況では、今回の大会での活動参加が初めてとする「初体験者」(35.2%)と「年数回くらい」(33.1%)とが全体の6割を占めていた。さらに、大会の特性で知的障害者が主役の大会であることから、身近に障害者がいるかどうかをたずねた。その結果、「いない」(25.8%)が最も多かったが、「友人・知人にいる」(23.7%)も同等度で、「たまに見かける」(18.7%)も含めると、四人中三人は日頃から障害者に会える機会があり、障害者を認識した状況にあるといえよう。

これまでのスポーツイベントのボランティア調査において、比較的若い世代の女性の参加率が高いとする報告(前田, 1997; 新出ら, 1998; 松本, 1999; 大沼ら, 2000; 大堀ら, 2001; 松岡ら, 2002)があり、本研究でも同様の傾向がみられた。ボランティア募集方法やデータ収集上の相違も考慮する必要がある

表2．サンプルの特性(2)

	n	%
【大会情報源】		
友人・知人から	90	(31.1)
新聞雑誌	3	(1.0)
テレビ・ラジオ	7	(2.4)
ポスター・チラシ	20	(6.9)
ダイレクトメール	2	(0.7)
所属団体	139	(48.1)
ホームページ	14	(4.8)
その他	14	(4.8)
【きっかけ】		
自らすすんで	161	(55.7)
地域や職場(学校)などの所属団体に勧められて	71	(24.6)
家族や親戚に勧められて	5	(1.7)
友人や知人に勧められて	46	(15.9)
メディアを通して	5	(1.7)
その他	1	(0.3)
【イベント活動日数】		
1日	51	(17.7)
2日	59	(20.5)
3日	79	(27.4)
4日以上	99	(34.4)

が、総じて、スポーツイベントに参加したボランティアのサンプルに共通した属性として、10・20歳代の若年層、女性、未婚が挙げられる。ボランティア活動への関心は、男性よりも女性の方が高いこと（総理府，1994）が報告されている。イベント特性としてみられる短期間の一過的活動であることや活動に専門的知識や経験を必要としない気軽に参加可能なことなどの活動特性が、潜在層である若年層女性の活動参加を促しているのであろう。

2. 参加動機の因子構造

サンプルの参加動機構造を把握するために、参加動機項目を因子分析（バリマックス直交回転）し、因子の抽出を試みた。その結果、表3にみられるように29項目8因子を抽出した。累積寄与率は52.94%で全分散の5割を説明し

ている。これら8因子を因子負荷量の大きさによって検討し解釈することにより、それぞれ次のように命名した。

第1因子は、新しい知識や経験の獲得、社会的視野の拡大、自己の成長、多くの人との交流など潜在的欲求を活動参加により達成したいとする項目であることから「自己実現」と命名した。第2因子では、他の人やイベント運営、さらには社会に役に立ちたいとするボランティアの中核をなす愛他的項目がみられる。したがって「社会貢献」とした。第3因子はイベントの主役であり、かつ障害者である選手（アスリート）の魅力が醸し出す動機、さらには選手のサポートに関する項目であることから「選手支援」と解釈した。第4因子では、余暇時間を有効に活用した気分転換やストレス解消の項目である

表3．参加動機項目の因子分析結果

動機項目		因子負荷量	固有値	寄与率	
第1因子	新しい知識や経験を得たい	0.845	2.568	8.855	0.809
	社会的な視野を広げたい	0.687			
	自分自身が成長したい	0.511			
	多くの人と出会いたい	0.461			
	ボランティア活動に興味がある	0.432			
第2因子	活動を通して社会の役に立ちたい	0.735	2.568	8.855	0.809
	他の人の役に立ちたい	0.673			
	イベント（プログラム）運営に役立ちたい	0.650			
	イベント（プログラム）を盛り上げたい	0.588			
第3因子	障害者に関心がある	0.747	2.289	7.894	0.798
	参加者（アスリート）に関心がある	0.719			
	参加者（アスリート）と交流できる	0.687			
	参加者（アスリート）の活動を支援したい	0.516			
第4因子	気分転換になる	0.807	2.092	7.213	0.718
	ストレス解消になる	0.696			
	余暇時間を有効に活用したい	0.471			
第5因子	知人や友人に強く頼まれた	0.656	1.985	6.843	0.678
	大会側から依頼された	0.598			
	会社や学校、地域団体で参加することになった	0.568			
	記念品などがもらえる	0.491			
第6因子	スポーツ活動を支援したい	0.809	1.655	5.706	0.733
	スポーツに関心がある	0.689			
	イベント（プログラム）に興味がある	0.351			
第7因子	活動を通して自分を表現できる	0.539	1.487	5.127	0.686
	身につく技術や技能が得られる	0.519			
	自分の知識や経験を生かしたい	0.461			
	地域の活性化に関心がある	0.442			
第8因子	他の人から認められたい	0.467	0.845	2.914	0.512
	何らかの報酬を得たい	0.306			
			累積寄与率	52.943	

因子抽出法：主因子法、回転法：Kaiserの正規化を伴わないバリマックス法

ため「レクリエーション」とした。第5因子では、知人や友人、会社や学校、地域団体など所属団体、さらには大会運営側からの勧誘など他律的な項目がみられるため「依頼」と命名した。第6因子は、スポーツ活動自体への興味・関心、支援を意味する項目であることから「スポーツ活動」とした。第7因子は活動参加者がもつ知識や経験、技術・技能を活動に反映（発揮、支援）したいこと、さらにはそれらの習得を望んでいることから「自己表現」と命名した。最後に第8因子では、他人からの認知や賞賛など、精神的、物的報酬など見返りを望む項目であると推察されることから「報酬」とした。

また各参加動機因子項目の安定性（内部整合性）を算出した。その結果、第8因子（0.512）、第5因子（0.678）、第7因子（0.686）が若干

安定性に欠けるが、他の因子においては安定性がある結果といえよう。

次に、各参加動機因子ごとの強さを比較するために、各因子の合計得点を因子内の項目数で除し、各因子ごとの平均値を算出した（表4）。ちなみに参加動機因子の平均値の最小値は1、最大値は5で、数値が高いほど肯定的解釈となる。

その結果、「自己実現因子」（4.12）が最も高く、ついで「選手支援」（3.93）、「社会貢献」（3.86）の順であった。一方で「依頼」（1.72）、「報酬」（1.74）では得点が低かった。ボランティア活動への参加動機について、Henderson（1979）は「愛他的動機」と「個人的動機」に大別されることを報告している。同様に、野上（1974）は「他者志向的動機」と「自己志向的動機」、また長ヶ原ら（1991）は「社会的ボランティア動機」と「個人的ボランティア

表4．参加動機因子得点の平均値

因子名	平均値 (n=285)	標準偏差	男性 (n=61)	女性 (n=224)	t 値
自己実現	4.12	0.705	4.07	4.13	-0.67
社会貢献	3.86	0.762	3.93	3.84	0.85
選手支援	3.93	0.770	3.86	3.94	-0.75
レクリエーション	2.28	0.919	2.25	2.28	-0.28
依頼	1.72	0.807	1.93	1.66	2.92 *
スポーツ活動	3.50	0.954	3.66	3.46	1.49
自己表現	2.72	0.854	2.91	2.67	1.95
報酬	1.74	0.811	1.84	1.72	1.02

* p < 0.05

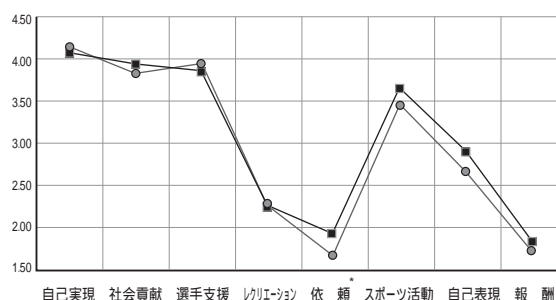


図1．性別参加動機因子得点の平均値

—■— 1 男性 -○- 2 女性 * p < 0.05

表5．年代別参加動機因子得点の平均値

因子	10歳代 (n=93)	20歳代 (n=70)	30歳代 (n=31)	40歳代 (n=33)	50歳代 (n=33)	60歳以上 (n=25)	F 値
自己実現	4.31	4.34	3.88	4.07	3.81	3.57	8.92 ***
社会貢献	3.86	3.81	3.81	4.13	3.76	3.86	1.03
選手支援	4.13	4.00	3.65	3.91	3.70	3.62	3.81 **
レクリエーション	2.13	2.66	2.23	2.05	2.29	2.11	3.66 **
依頼	1.63	1.65	1.65	1.84	1.82	2.05	1.48
スポーツ活動	3.53	3.59	3.39	3.66	3.29	3.36	0.81
自己表現	2.76	2.90	2.50	2.64	2.65	2.51	1.46
報酬	1.98	1.93	1.58	1.58	1.33	1.30	6.60 ***

* p < 0.05, ** p < 0.01, *** < p .001

ア動機」と表現し分類している。愛他的（他者志向・社会的）動機は、ボランティアの中核的動機となるが、本結果においても、それにあたる「社会貢献」や「選手支援」が肯定的な高い得点を示している。また個人（自己志向）的動機では、「自己実現」が、参加動機因子の中で最も高い得点を示した。本参加動機の因子構造とその強さは、本サンプルが、見返りを求めない主体的かつ積極的な活動への参加を裏付けるものとして、ボランティアの公共性（社会的貢献活動）、自発性、無償性を説明する結果であるといえる。

3. 属性要因（性、年代別、活動経験別）による比較

各参加動機因子について属性要因（性、年代別、活動経験別）による比較を試みた。

まず、性別による各因子得点の平均値の比較を表4に示す（図1）。参加動機8因子を性別によるt検定を施した。その結果、「依頼」においてのみ5%水準以下で有意差がみられ、女性よりも男性の方が有意に高かった。

次に、年代別による各因子得点の平均値の比較を表5に示す（図2）。10歳代から60歳以上の6つの年代別に、参加動機の各因子得点の平均値の分析を試みた。分散分析の結果、「自己実現」「選手支援」「レクリエーション」「報酬」の4因子において5%水準以下で有意差がみられた。さらにこの4因子において各年代による

多重比較分析を施した。その結果、「自己実現」「報酬」において、10歳代と20歳代が50歳代、60歳以上の年代よりも5%水準以下で有意に高かった。また「選手支援」では、10歳代が30歳代、60歳代以上よりも有意に高かった。「レクリエーション」では20歳代が10歳代と40歳代よりも有意に高い結果であった（表6）。

ボランティア活動経験別の因子得点の平均値の比較を表7に示す（図3）。今回の活動が初めてのボランティア活動とする初体験者とそれ以外の経験者とに分けて分析した。t検定の結果、「選手支援」「レクリエーション」「自己表現」において経験者の方が初心者に比べ有意に高い得点を示した。また「依頼」をのぞいた他の因子得点をみると、経験者の方が初体験者に比べ高い傾向がみられた。

性別による比較では、「依頼」のみ女性よりも男性の方が有意に高い結果であった。他の因子に比べ、依頼得点自体の得点は低く必ずしも肯定されるものではないが、活動参加の勧誘や協力要請、さらには人員の派遣要請が、大会運営側から各関連団体となる会社や学校などの所属団体を通して行われ、動員（派遣や強制参加）があることも少なくないのが実状であろう。ただ、女性に比べ男性の方が、依頼による参加であるとの認識が高いのはなぜだろうか。さらに精査が必要である。

また年代別の比較で、有意差がみられた因子

表6 . 年代別多重比較のまとめ

因子名	多重比較結果 (p < .05)
自己実現	10歳代、20歳代 > 50歳代、60歳以上
選手支援	10歳代 > 30歳代、60歳以上
レクリエーション	20歳代 > 10歳代、40歳代
報酬	10歳代、20歳代 > 50歳代、60歳以上

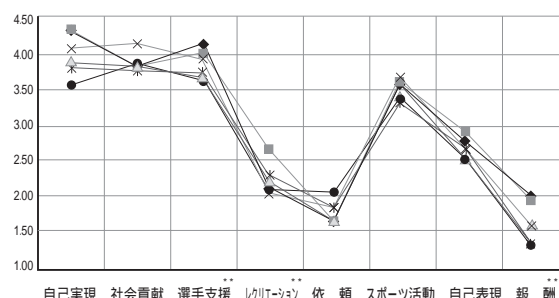


図2 . 年齢別参加動機因子得点

◆ 10歳代 ■ 20歳代 ▲ 30歳代 ** p < 0.01 *** p < 0.001
 × 40歳代 * 50歳代 ● 60歳以上

を多重比較した結果、主に 10、20 歳代の若年層と 50、60 歳以上とする熟年層との差であり、若年層の得点が高い結果となっている。このことは若年層では障害者である選手の支援、イベント運営などの活動参加を通して社会的な視野の拡大、知識や技術習得、さらには、多くの人との出会いを通じた自己の成長を望んでおり、他の人から認められるような精神的・心的報酬を望む欲求の現れ（ラブロック，1991）とみることができる。また 20 歳代においては、「レクリエーション」が、10 歳代、40 歳代とにおいて有意な差がみられ、高い得点となっている。20 歳代は、未婚（95.7%）の学生（62.9%）と会社員（20.0%）が多く、他の年代に比べ、比較的時間的余裕があることに加え、学校や会社とは異なる有意義な活動を行うことに価値を見いだしている（佐藤ら，1996）と推察できよう。「社会貢献」や「スポーツ活動」、「依頼」では有意な差はみられなかった。これは、スポーツ活動（イベント）を通して社会に還元される活動を自発的に行うとする、スポーツボランティアの共通事項的な事柄（理念）を代表する動機であるためと考える。実際にイベントでの活動現場では、年齢を問わず老若男女が、それぞれの役割を力を合わせて一緒に活動に従事している光景をいつも目にすることができることから感じ取ることができよう。

活動経験別について、経験者の方が初体験者に比べ高い得点を示している。この結果は、活動に参加する目的（動機）が、初参加者に比べ明確であることを意味している。大会の主役である選手（障害者）への関心や支援、また活動参加による気分転換、余暇時間の有効活用、さらには自分自身のもつ知識や経験を生かせる自己表現の場としての認識が、初体験者よりも高いと解釈される。一方で、「依頼」において有意差はみられなかったが、初体験者が経験者より得点が高かった。これは初めての活動に参加したボランティアにとって、友人や知人、さらには所属団体からの勧誘や依頼などのきっかけが、ボランティア活動参加への足がかりになっていることの表れと受けとめることができよう。

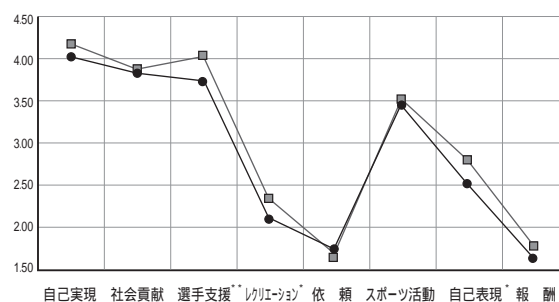


図3．活動経験別参加動機因子得点の平均値

● 初体験 ■ 経験者 * p < .05 ** p < .01

表7．活動経験別参加動機因子得点の平均値

因子名	初体験者(n=98)		経験者(n=182)		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
自己実現	4.02	0.770	4.16	0.665	- 1.532
社会貢献	3.83	0.817	3.87	0.737	- 0.477
選手支援	3.73	0.831	4.03	0.721	- 3.111 **
レクリエーション	2.12	0.958	2.35	0.898	- 2.020 *
依頼	1.77	0.826	1.68	0.791	0.874
スポーツ活動	3.46	0.944	3.53	0.965	- 0.582
自己表現	2.54	0.823	2.81	0.865	- 2.542 *
報酬	1.66	0.727	1.80	0.854	- 1.429

* p < 0.05, ** p < 0.01

IV. まとめ

本研究では、スポーツイベントにおけるボランティアの参加動機について、その構造を探索的に明らかにすることを目的として、知的障害者の全国大会での活動参加者を対象に質問紙調査を実施し、属性要因（性別、年代別、ボランティア活動経験別）を基に分析した。

その主な結果は以下の通りであった。

- (1) サンプルには、学生 (48.6%) を中心とした 10・20 歳代 (56.7%) の若年層の未婚 (65.1%) の女性 (78.5%) が多い。
- (2) 参加動機項目を因子分析した結果、第 1 因子「自己実現」、第 2 因子「社会貢献」、第 3 因子「選手支援」、第 4 因子「レクリエーション」、第 5 因子「依頼」、第 6 因子「スポーツ活動」、第 7 因子「自己表現」、第 8 因子「報酬」を抽出した。
- (3) 因子得点の平均値を算出した結果、「自己実現」(4.12) が最も高く、「選手支援」(3.93)、「社会貢献」(3.86) の順であった。一方、「依頼」(1.72)、「報酬」(1.74) は得点が低かった。
- (4) 因子得点の平均値を比較した結果、性別では、「依頼」において 5% 水準以下で女性よりも男性の方が有意に高かった。
- (5) 年代別による比較では、「自己実現」「選手支援」「レクリエーション」「報酬」において 5% 水準以下で有意差がみられた。
- (6) 多重比較した結果、「自己実現」「報酬」において、10 歳代と 20 歳代が 50 歳代、60 歳以上の年代よりも 5% 水準以下で有意に高かった。また「選手支援」では、10 歳代が 30 歳代、60 歳代以上よりも有意に高かった。「レクリエーション」では 20 歳代が 10 歳代、40 歳代よりも有意に高かった。
- (7) ボランティア活動経験別の比較では、「選手支援」「レクリエーション」「自己表現」において経験者の方が初心者に比べ有意に高い得点を示した。「依頼」を除いた他の因子得

点をみると、経験者の方が初体験者に比べ高い傾向がみられた。

障害者のスポーツイベントにおけるボランティア活動の参加動機の構造を明らかにし、ボランティアの属性（性別、年齢（年代）別、ボランティア活動経験別）により、比較、検討してきた。その結果、ボランティアの理念としての愛他（社会、他者志向）的動機や個人（自己志向）的動機を因子構造の中に見いだすことができた。また特に 10・20 歳代の若年層の個人（自己志向）的動機得点の強さは、スポーツイベントにおけるボランティア活動の将来的発展を肯定的に予測できるものとしてみることができると考えられる。ボランティアの活用においては、年代や活動経験による相違を前提として、ボランティアの募集や研修、活動役割に配慮することが、活動満足や活動の継続につながるものと思われる。そのためにボランティア活動への参加行動を予測する変数として、参加動機に関連する要因（活動満足、活動継続性等）との精緻な分析が必要とされる。今後の課題としたい。

本研究は、平成 14 年度文部科学省科学研究費補助（課題番号 14780020）および平成 14 年度山口県立大学創作活動研究助成の成果の一部である。

V. 文 献

- CH ラブブロックら (1991) 公共・非営利のマーケティング, pp.511-525, 白桃書房.
- 長ヶ原誠ら (1991) スポーツイベントのマネジメントに関する研究 (2) -ボランティアの継続意欲の視点から-, 鹿屋体育大学研究紀要 6:69-75.
- Henderson,KA (1979) *Motivations and Selected Characteristics of Adult Volunteers in Extension 4-H Youth Programs in Minnesota*, National Recreation and Park Association Congress.
- Henderson,KA (1981) *Motivations and Perceptions*

- of Volunteerism as a Leisure Activity, J of Leisure Research 13:208-218.*
- Henderson,KA (1984) *Volunteerism as Leisure,J of Voluntary Action Research 13 (1).*
- 小島廣光 (1998) 非営利組織の経営-日本のボランティア-, 北海道大学図書刊行会.
- 日下菜穂子ら (1998) 中高年のボランティア活動参加の意義, 老年社会科学 19(2):151-159.
- 松岡宏高ら (2002) 2002FIFA ワールドカップにおけるボランティアの動機の比較分析, 日本スポーツ産業学会第 11 回大会発表資料.
- 松本耕二 (1999) スポーツボランティアの類型化に関する研究-障害者スポーツイベントのボランティアに着目して-, 山口県立大学社会福祉学部紀要 5:11-19.
- 前田博子ら (1997) スポーツボランティアの情報チャンネルに関する研究-1995 世界体操選手権鯖江大会について-, 兵庫県体育・スポーツ科学 6:19-28.
- 野上芳彦 (1974) ボランティア活動入門, 白樹社.
- 野川春夫ら (1990) 地域活性化におけるスポーツイベントの総合的研究・調査報告書, 鹿屋体育大学.
- 大沼義彦ら (2000) スポーツイベントの参加意識と評価, 第 51 回日本体育学会体育社会学分科会発表論文集, pp.7-12.
- 佐藤光邦 (1995) 各種世論調査等によるボランティア活動の現状, ボランティア白書 1995 年版, pp.156-180, 社団法人日本青年奉仕協会.
- 佐藤豊ら (1996) スポーツボランティアの参加動機に関する研究-1995 年世界体操競技鯖江大会について-, 第 47 回日本体育学会体育社会学分科会発表論文集, pp.170-175.
- 世戸俊男ら (1996) 震災ボランティアの社会的学的研究 (2) -参加者タイプによる分析-, レジャー・レクリエーション研究第 26 回大会発表論文集, 34:94-97.
- 新出昌明ら (1998) 長野オリンピックにおけるボランティアイメージの分析-スポーツ経営学の視点から-, 東海大学紀要体育学部 28:21-30.
- 総務庁 (1993) 青少年とボランティア活動-「青少年のボランティア活動に関する調査」報告書, pp.38-40.
- SSF 笹川スポーツ財団 (1996) スポーツボランティア, スポーツ白書, SSF 笹川スポーツ財団, pp.88-99.
- 総理府 (1994) 生涯学習とボランティア活動, 月刊世論調査 26 (5) :53-101.
- 杉本政治ら (1995) 「ボランティア社会」構築の条件-社会福祉ボランティア活動を中心に-, NHK 放送文化調査研究年報 40:117-190.
- 高見栄喜ら (1997) スポーツボランティアの期待と満足に関する実証的研究, 第 48 回日本体育学会体育社会学分科会発表論文集, pp.37-42.
- 高見 彰ら (1996) 震災ボランティアの社会的学的研究 (1) -性別による分析-, レジャー・レクリエーション研究第 26 回大会発表論文集 34:90-93.
- 田尾雅夫 (1999) ボランティア組織の経営管理, 有斐閣.
- 山口泰雄 (1996) 生涯スポーツとイベントの社会学, 創文企画.
- 山口泰雄 (1998) ボランティア活動の広がり「スポーツを支える活動」の進行, スポーツと健康, 第一法規出版, 30 (6) :23-25.

(平成 14 年 3 月 20 日 受理)